

2010年6月25日(金) 第3回 情報ひろばサイエンスカフェ

テーマ：女性と男性の会話－会話は“性差別を再生産する装置”か？

講師：内田伸子氏（日本学術会議会員、お茶の水女子大学大学院人間創成科学研究科教授）

ファシリテーター：木村茂光氏（日本学術会議会員、東京学芸大学教育学部教授）

サッカーW杯で日本の決勝トーナメント進出がかかった白熱した試合の翌日に行われた今回のサイエンスカフェ。チームプレイの中で会話がいかに大切か、監督の指示に頷き確認し合う日本代表の選手達を例に挙げながら内田先生のお話は始まりました。

『会話は対人関係を映し出す鏡である。』男女の会話の中に生まれるメカニズムを「実証科学」とも言われる心理学の視点から明らかにしていくというのが今回のテーマです。

アメリカの論文では、会話の中で相手が話している途中の「割込み」や反応を返さない「沈黙」などの「リズムの逸脱」は男性に多く見られ、「相槌」や「不可疑問」、「沈黙の修復」などの「協力型発話」は女性に多く見られると発表された。それに対し、一果たして本当にそうなのか— そう思われた内田先生は、大学生を被験者とした実験やTVのトーク番組で司会者とゲストの会話を分析し、実証の為の研究が行われました。

その結果、「割込み」は女性同士の会話の中で多く見られ、逆に「沈黙の修復」など会話進行に協力的な役割は異性と話している時の男性に多く見られたそうです。また、男女間に限らず、トーク番組ではゲストが目下か目上かによって「沈黙」が多い場合、「協力型発話」が多い場合など、同じ司会者でも会話の相手であるゲストとの社会的な関係によって発話のスタイルは変わるということが実証されたのです。

結論として、男女間だけでなく相手との社会的な関係によっても会話には非対称性が生じるが、良いコミュニケーションは状況依存的にリズムを共有していくことで成立するもの。その為には相手の言葉を「聞く」ではなく「聴く」、つまり相手の心の声を受け止め、思いやりをもって会話を進めることが大切だという内田先生のお言葉が印象的でした。

内田先生の講演後は質疑応答の時間が設けられました。英語の早期教育の是非についてや、ビジネスの場での外国人との会話方法についてなど質問は多岐にわたりましたが、内田先生はその都度多くのデータを示しながら丁寧にお答え下さいました。

飲み物を頂きながら明るい雰囲気ひろばラウンジで行われたサイエンスカフェ。非常に興味深い内容で時間が経つのがあっという間でした。普段意識せずに行っている自分の会話を客観的に振り返ることができた貴重で有意義な時間でした。